



たっくんへ

はじめてのおつかい
がんばってね!!

。なすのぬかづけ 1ぽん

。お茶 1ふくろ

。牛乳 1びん

。にんじん 1ぽん

みどり鯨 1ひき

うずまきりんご 2こ

きょうは1つだけ
たっくんのすきなおかしを
かていいわよ!

ママより。



きらいでも
ちゃんと
かうこと!!

あなたは1人でおつかいをしたことがありますか？

これは、ある男の子がはじめておつかいにでかけるおはなしです。



これから入るスーパーのまえで、たっくんはドキドキしながらたっていました。



「ぼく1人でできるのかな・・・？」
おそるおそるお店に入ってみると・・・



「わああ〜・・・」

1歩足をふみ入れたたっくんは、上をみあげてびっくり。

そこには、たっくんが今まで見たこともない世界がひろがっていたのです。



大きなとけい、いろとりどりのたても、まっ青な空にながれるくも。
そして、はるか上をとんでいるのはふしぎなのりもの・・・。
たっくんがながめていると、
「いらっしゃい、ぼうや！」と、声が聞こえました。

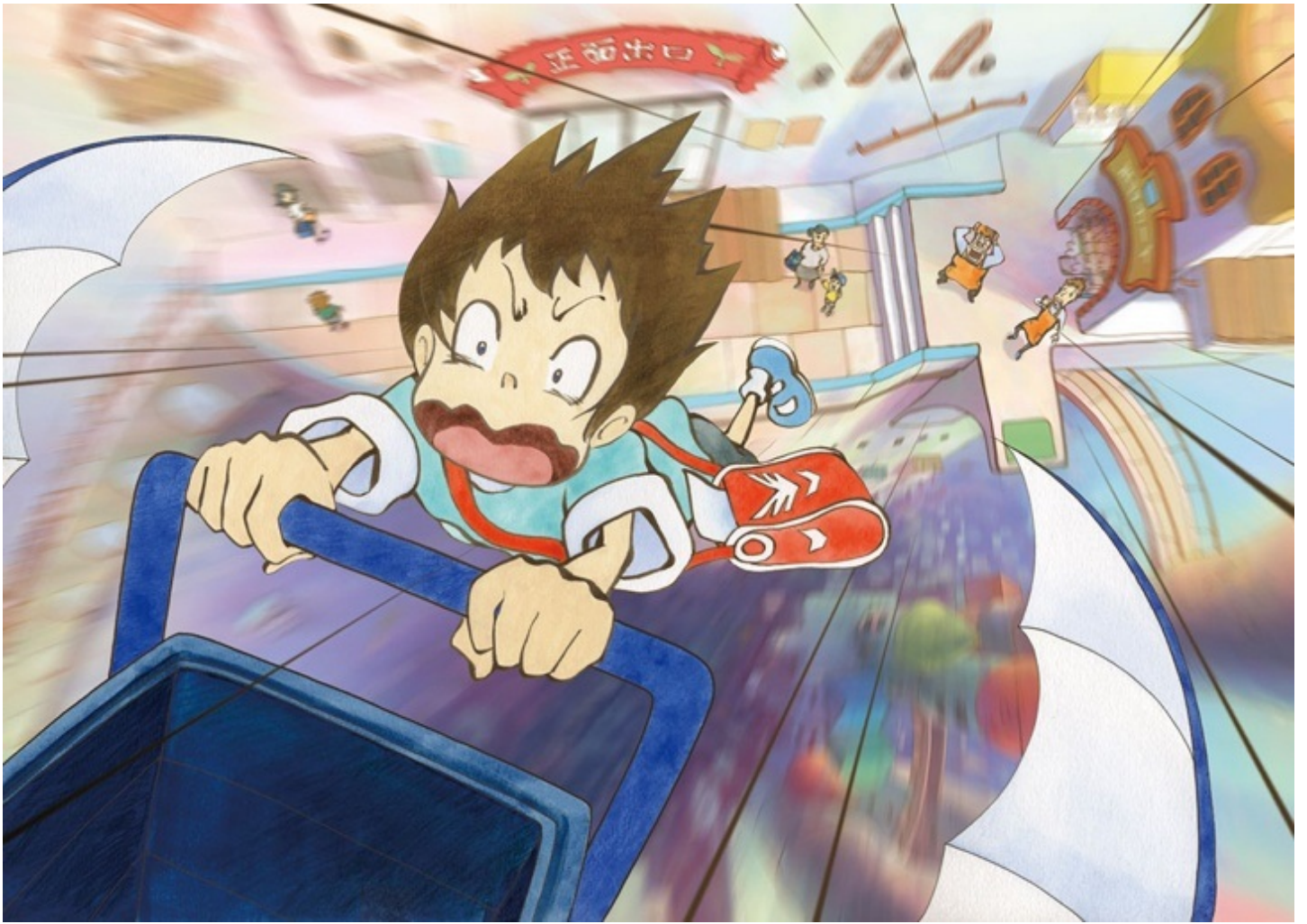


むこうでお店の人がたっくんをよんでいます。

「そうそう、こっち。このスーパーでは、空とぶカートでかいものをするんだ。
おいで。きみに使い方をおしえてあげるよ。」



「さあ、のって。かんだんだよ。ボタンをおしたら出発だ。」
店のお兄さんが言いました。でも、お兄さんはだいじなことをわすれていたのです。
「こらっ！スピードがはやすぎるぞ！」
店のおじさんがさげびましたが、もう手おくれでした。
お兄さんはボタンをポチッ・・・！



「うわーああああ!!!」
カートはものすごいきおいでとびだしていきました。





さて、たっくんは何とかスピードをおとせたものの、カートにしがみついて、まだふるえがおさまりません。

すると、どこからかいせいのよい声がひびいてきました。



「いらっしゃいらっしゃい、ぬかづけはいかがっすかー！」
向こうのほうで元気よくさげんでいたのは、ぬかづけ屋さんでした。



「あの一、なすのぬかづけを・・・」
たっくんがぎこちなく声をかけました。
「へいっしゃい！おう、ボーヤ。1人でおつかいか、たいしたもんだ！
なになに、なすのぬかづけだな。よっしゃ！おっちゃんがサービスしたろ！」



「どうもありがとう。」

ぬかづけを買い、おじさんにお礼を言って、たっくんは次の店へと向かいます。

「まいどっ！ボーヤの探してるお茶の店ならあっちのほうにあるはずだ。

気をつけていくんだぞ！」



「あ、あった！」
おじさんの言うとおりに、しばらく飛んでいくと、
お茶屋さんのかわらやねが見えてきました。



お茶屋さんの店主は、ねじりはちまきのおじいさんでした。

たっくんはここでお茶葉を1ふくろ買いました。

それから、ママの手紙にチェックをつけてひと休み。



こうしてスーパーをまわっていくうちに、たっくんはだんだん楽しくなってきました。かべ一面に、お店がずらりとならんでいます。

肉屋さん、おでん屋さん、お酒、もなか、かりんとう、うなぎ。

そして頭上には、どこかへとつながっている大きなトンネル……。



牛乳屋さんでは、店長のマリーさんがあいそよくいました。
「あら坊ちゃん、おつかいな？えらいわねえ。
うちのミルクは世界一おいしいのよ！ママにわたしてあげてね。」



フルーツコーナーでは、天井からうずまきもようのりんごがなっています。
まるで星のような形をしたくだものもあれば、
人が上にのれるほど大きなスイカもありました。



魚コーナーはまるで海底のようでした。
「みどり魚ください。」
たっくんが注文すると、
漁師のおじさんは、泳いでいる魚を
目の前でごうかいにつりあげてくれました。



次にやってきたのは、たくさんのトンネルがならんでいる通りでした。
たっくんが大好きなおかしコーナーへのトンネルもあるようです。



「えーと、あとは何をかうんだったっけ？」
たっくんはもういちど手紙を調べました。
するとこのこりは、だいきらいなにんじんと、だいすきなおかし
の2つだけでした。



「う～ん、どっちにいこうかな・・・？」



「よしっ、おかしコーナーへ行っちゃえ！にんじんはあとでいいや！」
しかしこの時、たっくんは気づかなかったのです。
だいじなさいふをおとしてしまったことに・・・。



トンネルをぬけたたっくんは思わず目をかがやかせました。
そこには・・・



色とりどりのおかしの世界が広がっていたのです！

クッキーやビスケットの道、チョコレートのやね、キャンディのかんばん、ゼリービーンズ、ドーナツにプリン……。

あたり一面があまくて香ばしいにおいでみたさされていました。

そんな中たっくんは、いちばんほしかったおかしのある店へとかけ出しました。



ほら、あたらしいバトルカードだ。キラキラ光るし、すっげー強いんだぜ！」
男の子たちが集まって話しています。たっくんも行ってみると、ありました。
だかし屋さん、カードつきのおかしがならんでいます。

「これ、くださいっ！！」
たっくんは大喜びで、さけぶように言いました。



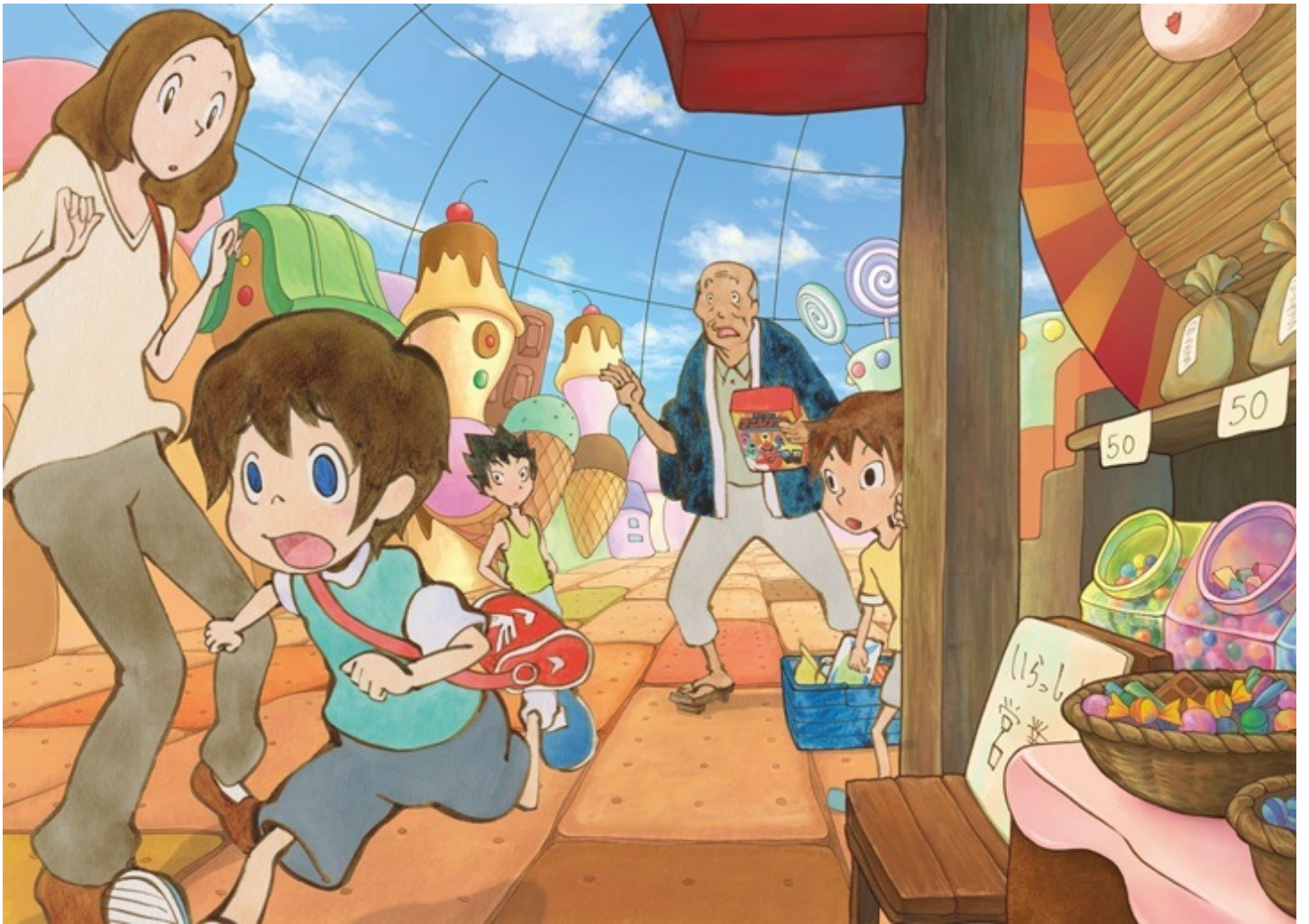
「ほい、1個200円じゃよ」

ところが、お金をはらおうとかばんの中を見ると、さいふがありません。

「あれ？あれれ！？」

どれだけさがしても、さいふは出てきません。

体中から汗がふきだしてきました。



「もどってさがさなきゃ！」

たっくんは大あわてで今来た道を走り出しました。

「これぼうや、どこへ行くんじゃ!？」

おじいさんがよぶのも、たっくんには聞こえません。



しかしトンネルの先で待っていたのは、
さっきの場所ではありませんでした・・・。



冷たく、生ぐさい空気があたりをじっとりと包んでいました。
気のせいか、周り中から恐ろしい笑い声が聞こえてくるようです。
「道をまちがえたのかな・・・もどらなくちゃ」
たっくんは、か細い声でつぶやきました。



ところが後ろを向いたとたん、トンネルの入り口が音もなく消え失せたのです。
そして暗闇の中からすがたをあらわしたのは、
ユラユラとしのびよる黒い影でした。



たっくんはあとざりしようとしてましたが、
かいだんをふみ外して転げおちてしまいました。
黒い影は不気味にうごめきながら、みるみるうちに迫ってきます。
そのとき、はるか遠くにひとすじの光が見えました。



たっくんは影をふりはらい、必死に光へと走りました。
光はだんだんおおきくなり、ついに、



ぱっと目の前がひらけ、たっくんは目をぱちくりさせました。



そこには、見わたすかぎり、田んぼや畑が広がっていました。
あたたかい日差しに、小鳥のさえずり。
やさしい風がふいて、たっくんのほおをなでました。
下のほうでは、おばあさんが手まねきをしてよんでいます。
たっくんは、おばあさんに導かれるように畑へとおりていきました。



「おつかいかね？1人でようがんばったねえ」

おばあさんの声をきいたたっくんは、わっと泣き出してしまいました。

「おやおや、どうしたね？」

たっくんはそのままおばあさんのうでの中で、いつまでも泣きつづけました。

おばあさんは、たっくんのもっていた手紙をじっと見て、やさしくほほえみました。



「元気をだして。さあ、これをもってお行き。」

おばあさんはにんじんを1本とりだすと、たっくんに手わたしてくれました。

そして、たっくんの両手をしっかりとにぎりしめました。

「笑顔でお母ちゃんのところへかえるんだよ。」



おばあさんと別れるころには、日はもうかたむきかけていました。
おばあさんは、出口へつながる扉にたっくんを案内してくれました。
「さあその扉からお行き。また会えるといいのう。」
たっくんはおばあさんに何度もお礼をいって、出口へと向かいました。



扉をひらくと、そこは最初にいたスーパーの前でした。
おどろいたことに、外はすっかり夜になっていました。
たっくんが目を丸くして見回していると、ひとりの女の人がかけよってきました。



「ママ！」

「たっくん！たっくんだわ！！けがはない！？無事だったの！？ああよかった！！」

ママは半分なきながらたっくんをぎゅっとだきしめました。



こうして、たっくんはママといっしょにスーパーをあとにしました。
夜空には、たくさんの星がキラキラとかがやいていました。

👉 おわり 👈

